



「精神科医を志した頃」

脳神経病態制御学講座 精神医学教授
尾崎 紀夫



入学試験の口頭試問で「医学部を卒業したら、将来、どのようなことがやりたいか？」という質問をする機会が、ここ 10 年の中で何度かあった。入学前から、「医学部を卒業したら何がやりたい」と考えている受験生は、本当のところそれ程多くはない様にも思うが、この質問に対する準備万端の受験生は、よどみなく返答してくれる。予想の範囲内の話がが続くと、「この質問で、果たして選びたい受験生を選ぶことができるのか？」という「質問の妥当性」に対する疑問が生じるようになり、試験担当者としての気持ちもダレがちとなる。そんな折は、「対人場面で予定調和的な行動が取れるという資質も臨床医としては必要であり、その点でこの質問も妥当性はあるか」などと思いつくこともある。しかし、「精神科医（児童精神科を含む）になりたい」という答えを聞くと、つい身を乗り出し（「質問の妥当性」の観点では消し飛んで）、色々質問してしまう。

私が受験した 30 年ほど前には、大学入試に口頭試問はなく、医学部への志望動機を問われることもなかった。しかし、入学後やローテート研修医時代に、「何科になるつもりか」と聞かれて、「精神科医になるために医学部に入った」と言うと、大方の反応は「物好きな」といった顔をして、「何でまた精神科に？」と尋ねられることが多かった。

かつて、精神科医は医師の中で変わり者であった。耳鼻科医である母親から「精神科医になったのは変わった人ばかりだったが、インターンをともにやった笠原先生は普通の人だったから、笠原先生が教授である名大なら良いだろう」と言われるほどであった。さらに、名大精神科の入局希望者とは教授が面接をする慣わしになっていたが、笠原教授が医者の子の師弟の入局希望者に、「君の親御さんは、君が精神科医になることを許可しておられるのか」と確認されるのが常であった。他科の医師からすると「精神科医は変わっている。『あんな科に』自分の子供を入局させることは考えものである」という意見が大半を占めていたのであろう。

さて、私が精神医学への興味を抱いたのは、文学への傾倒の延長からであった。中学から高校にかけて、私の周囲には文学好きの友人が多くおり、安部公房、三島由紀夫、倉橋由美子、別役実といった日本の作家、カフカ、

カミュ、ベケットといった海外の作家について、あれこれ話をしていた。20 世紀の文学には、フロイトの精神分析の概念が色濃く影響を及ぼしており、私も興味は精神分析へと傾斜していった。ちなみに、文学好きの友人の中には、今では精神科医になっているものが複数いるのも偶然とも思えない。

私が、とりわけ精神医学に対する興味を深めた切っ掛けは、加賀乙彦の小説「フランドルの冬」であった。日本人精神科医が留学したフランドルの精神病院が舞台であり、そこで主人公が経験するフランス文化とフランス精神医学が生き生きと描写され、作中の人物が口に「ひとの未知の部分にこそ無限の愛を感じる」、「この世界の中で絡め取られている存在である我々が、自由になれるのは狂気以外には異邦人になるしかない」といった言葉に私は魅了された。作者加賀乙彦は、精神科医、小木貞孝でもあり、拘禁反応に関する精神医学的論考でも知られている。加賀乙彦の作品以外にも、武田泰淳の作品である「富士」は、戦時下の精神病院を舞台にし、独特の無常観に裏打ちされたアイロニーに満ちていたが、何よりも「魅惑的な精神医学の世界」が描かれていた。また、加賀乙彦や北杜夫が、「頭医者事始め」、「ドクトルマンボウ医局記」といったエッセーの中で語る「精神科医局」は楽しい雰囲気を感じさせてくれた。

さて、小説は小説でしかないし、精神医学や精神科を取り巻く環境も時代ともに変化している。しかし、精神医学が「ひとの考え方、感じ方」を中心に置いていることに変わりはない。「興味あることを仕事に選んだ幸福」を感じている私は、学生や若い医師の諸君に、「自分も興味を大切にしたい」と願うものである。

